



近藤重飛所長記事 大槻茂實書

洋学文庫
文庫8
A 178



特
118
229

蝦夷記

六

蝦夷記事

全

大槻文庫

近處重死守重文書 既夫此乃完

上界 相不傷去春 杉前ヨ用々 終分四月十五 茲程
五月十六 二馬 爲海海日 杉前出之 彼に紙
し中界 去不 在 佛 去 化 通 了 サロラ 工トモ 海海凡 七里 以 化
ハ 去 衣 已 由 在 重 船 イ ナリ 不 忘 卷 々 中界 六月二
ア 夕 出 之 中界 三ヤマニホロイツミ 七口 山 嶮 岨 花 多 嶮 巖 能
壁 突 兀 々 馬 只 通 之 百 十 五 十 七 十 七 十 七 十 七 十 七
嶮 岨 附 解 步 始 之 莫 後 之 終 之 凡 石 以 岩 芽 之 躍 步 一
死 永 之 終 之 中 界 之 終 之 七 口 之 出 之 中界 六月廿二
ア 夕 之 出 立 中界 子 口 之 去 之 魯 西 重 人 伊 能 廣 氏 之 送 了



二見八反

渡す地を中累夫下海上十七里ナリ焉中累此島霧靄
 深く時々咫尺之糸より霧を中累此國より修治は居
 不入之故也高山大川此諸神代澤代に傳へるは澤山
 勇し美人を乞敷敷木皮彼雲仙宮と均く大に傳へる
 射野に之を尋ねて取相回高アトヤと云ふ五十里也
 之語古より松原凡三百里余極星ハ四十度ニ至るは帆風
 波七日亦一丈あり美人舟意澤海舟ハ物多しは
 一望僅六七里ニ止る之れ其波は強ハ三層に以て倍余
 波洋底四面ニ佛佛凡一丈五尺ハ底ニ深クナリ十五里
 陽に舟に帆を互に舟程を尋ね木皮を以て綴合

妻あり捲浪多し列美人も其溺浪に悉く由り何れハ
 呪符と唱へ必死に捲捲は海舟に死者は波に沈み舟も
 盤詰るや如く制し是とも急汐に強き舟は加取に人
 多し浪は舟を奪ひ去る舟も其に能く御す舟は舟下
 此エトコラを由り日本入浪海舟者不信と今も僅四層に丈
 あり此島に美人目も人を取去る也其初は年ハ不信
 此既溺没上定信を究るも其に及らざる其若くは
 音息も免或は草を解或は衣を脱ぐ一様揚を謀るハ
 不信を固く其結を以て流汐に覆舟は舟に生生理た
 之れ其體族を魚と西面を因是其我國の香を結

僅廿二日同中、其極妻他、故是海、四日、中松、前
 海、海舟、乃、別、他、ウ、カ、ワ、入、六、日、タ、子、ミ、ロ、リ、ナ、リ、は、海
 日、ナ、ア、ト、イ、ヤ、ヒ、志、ト、異、併、ク、ナ、シ、リ、為、事、途、カ、夫、人、ト、任、在、ス
 之、野、宿、の、ミ、シ、は、年、風、雨、亂、之、ミ、志、ト、少、少、ハ、志、士、構、聲
 之、志、ト、一、助、之、猶、美、所、在、極、夫、地、城、年、才、多、才、上、口
 フ、ウ、ル、ツ、ア、ハ、進、管、之、若、ク、ナ、リ、ト、通、去、和、季、在、海、上、司
 之、尚、未、ト、五、年、之、日、在、因、中、在、西、を、極、海、外、一、海、海
 経、歴、二、十、五、年、因、送、程、ハ、百、五、十、里、折、返、一、子、七、年、在、居
 之、里、法、三、年、ハ、ハ、ハ、百、里、内、カ、三、年、ハ、不、信、今
 年、二、十、九、日、ハ、六、十、六、海、不、信、如、キ、遠、道、之、名、只、人、ハ、不

この男児四方は、是處在懐、至、佐、躍、之、營、ハ、保、五、年
 之、在、也、僅、十、ヶ月、ニ、取、恩、情、を、欠、ク、ト、忠、孝、不、兩
 全、此、一、少、ク、惡、念、の、ミ、タ、ト、異、ト、思、フ

備中古松軒主人 近孫守重

六月廿二

私墓地捕之内洞官左列甲曹と云石係と係ハ去
 寛政十年子地妻地少用と云彼代と云砂多西
 亞境西靺鞨國境と云城地勢又極不其國境少所待
 助と云云
 甲曹之志有私之人此代其妻於
 之地於此私地之在甲曹弓鉄砲を用と云尚能
 一之私我少者之我鉄砲を用と云此城は刻
 松島に東海凡四百石餘聖工ト云云ト云口在日本
 橋至之無難高之在私地始と云海仕物先高
 其と云少解と云吾体是と云往と云程と云所と云
 極不之就海島沙之彫戸有私之人繩織と云其取云

風波を清き押所と云高と云牙と海底沈め候と云録
 歟蘇と云匹夫下仰と云石山日取と云武門と云砂岸
 ハと云無と云少用先高或先高構と云我と云中流と云
 甲曹を取所と云高用仕候と云先高アツケと云
 の悪苗長イコトイと云夫人を教書と云甲曹を少用
 既と云七八十人石手同高少指花と云毒箭討合と
 少と云死と云無業肉と云夫人中候少指受用と云甲
 曹と云候と云上候仕と云先高ハ砂と云あやと云大風と云
 四方と云運馬と云と云更船と云底と云隔と云極風と云
 後後半五と云取と云と云取妻人少と云死と云生と云船押と云

一つ等々故汐飯の博取ふく霞霞雨の及ぶ及ぶ
 或甲由の儘に長刀を抜き妻人を防捍仕取方不精
 於に忽て討殺す多し海に九死一生を漸く流す
 舟に以て只今書面を認めし後やうなる事なき
 其路ゆめぬ立花出るとも一垂しおとらば何事
 心ゆふれとて思ふに思ふに由りて人形
 口相傳へて一射す口は向く事なきに事なき
 難名ゆめぬ初め初め人形を流すに初め
 三百里才魚の魚は初め初め人形を流すに初め
 依りて國に警於る後依りて又鉄砲を流すに初め

殊に非字の体は呪文を念む怪交の俤を具にせし
 之を既三魯西且蟻食并吞する事ありて
 是れを以て心計果てて鉄砲并俤を取あげ魯西
 立初俤示非字の体は初め初め人形を流すに初め
 古廻り日本初俤を以て魯西の風俗に初め
 を何とて日本風俗を以て魯西の風俗に初め
 中高山の上押立を以て魯西の風俗に初め
 千コカカカカカカカカカカカカカカカカカカ
 二百二千里の孤島を以て魯西の風俗に初め
 是れを以て魯西の風俗に初め

土人の近海島とトあり由乃及び右社遠海諸島に
於て是國人の引受權を詳に立入契状を履伏するに
殊に後迄の助に及ぶに及ぶと申す内、是等人は其等
より乃に甲冑弓銃砲等利き威光を有るを以て其等
土人の新妻名をコンカ子千コヤシリカムイとト傳へ由り
是亦彼地に住む者なるに疑なく其等兵三層と申すは
後小普請方より秘するに文化四年に撫夷地は無人
未寇乱防に及り御右の御事又は爲撫夷地の事と
申す御事證據後南於けは後多事と人刺り勿論佐
外皆店內皆有甲冑弓銃砲と爲り傳へ撫夷地は後

之れより其等御事と申すは、撫前より西海に及ぶ
之奥撫夷地にナリ島巴急と西亞人乱妨場を以て其
地を撰りて其の地を治むるに於ては別地は其地を以
向五劫より難阻國境の取調自由にして其地はカニ
夷人より其地を御事国防に記す事有るに及り甲冑
兵用仕度等も甲冑兵用として其地は一所無き是れ
乃に其地を治むるに及り御事と申すは、世上一人
其地を治むるに及り御事と申すは、乃に其地を治むる
に及り御事と申すは、乃に其地を治むるに及り御事
と申すは、乃に其地を治むるに及り御事と申すは、

沙漠ニ暮雪と稱と伝或は地理と云ふ九尺たぬイシカリ河系
 深山迷水百ハナリと云々人跡無く如く雪平野宿
 山賊仕カキイコタンとト大難所と砂形覆溺及ハレ米印
 と水申シ及ル程と沙牙と粉粉米絶ち切リ魚食
 の仕外極苦中と申船を運下り水上を歩坂を登
 中丸少登宿仕又クシリ島アトイヤトト子モ口と凡カク
 余里急宿申と立度と云々我船と雲和風浪を不厭
 押切と外と年苦屈指不運及早去矣因埃と
 地勢五紅アた免人跡無く居る迷水臨入し米はそを
 之難を申押宿し此果宿と申助す也と云々個私老人微力も

東夷西戎を折衝仕上意外五族ふんを銀鏡ニ出逢
 飛鳥と云々是併武門ニ於て多岐路勅を云々ハク久
 之西目と云々我武を極難と云々子孫ニ我切
 程と云々他ノ海忠勅を勸了と云々此を云々小月係と
 彫刻仕没及と按申ニ世ノ心と云々我知我ノ小官
 激務と云々在と云々小殿身ノ限と云々古人名將勇士武
 切を美出ひと云々小春心と云々重と云々司向と云々勅三爰天
 小国と云々皇勅を傳粉骨碎身在東夷西戎を極
 仕美因陵下臣取締と助ニ勅初初を以て通曉と云々
 上之由實政を云々文化云々年々度相生何と云々戸四

幸少山殿が在り臨幸他日不克と交相得たこと上再
度身の上は用事あり別を月日に出松と上地口より
もりて位迄を吾日先と改在甲申りとも月日行程に
三歸も勅をありて生々大馬より折鷹集て遠天を
不冠と在り中 秋交 境情 節の生質に及ぶ子年ふ志
老朽より山に夢を 玉を重と 気血枯れ白髪 疎院に 秋
醒明の時節 研官と是有りあり 其邊切に水に泥と
そふ文と在り 年 四月 勅方より玉馬より 小普請入差和り
後年より去れ 去り 海時と心掛、天翁何程、
小松よりと 藤 武印、形見と 海老勅志と考起り

謂ふも 幸少と 幸少 才志と 右像と 是より 幸少 幸少
り 何りとも 右不係を代と 幸少 幸少 幸少
右不係と 所 謂 麻く 角と 前 建 物と 幸少 幸少
幸少 輪 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少
幸少 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少 幸少

小普請記

文政五年十一月

大田内記及石記

近藤守亮

文政四年丁未秋

極先地子ニリ：於々寫之

大椒茂實

大椒白藏片



